

# フォーラムニュース Vol.19 2020 11/20

発行：フォーラム・子どもたちの未来のために実行委員会

<http://www.f-kodomotachinomirai.com/>

文責／大竹永介

【連載企画】コロナの時代の子どもたちへ

**今年はほんとにみんな大変だったね**

**武田美穂**

連続企画「コロナの時代の子どもたちへ」。第4回の今月は武田美穂さん（写真）です。  
楽しいイラストとともに楽しみください。（編集部）



これを書いている今は11月半ば。

あともうちょっとで2020年が終わっちゃうって思うと、いやあ、早いなあ、、、。

今年はひたすらコロナに振り回された、落ち着かない年でしたね。

おとなも子どもも、ガマンガマン。自粛自粛。

いつとき学校も休校で、いつもならお休みっていうと、おーヤッター、さあ何しよう？誰と遊ぼう、とワ

クワクするとこなんだけど、

不要不急な外出はダメ！ってお家に閉じ籠められて、友だちにも会えなくて、時間をどう使っているかわからなくなっちゃって、いらいらしたり、戸惑ったり、なんか人生に（笑）疲れちゃったりしたんじゃないかなあ。（わたしはといえば、もともとひとりで家で仕事する生活なので、それほど変わらなかったかな）

今現在は学校も再開して、公園でみんなと遊んだりも出来るけど、まだまだコロナはこのあとどうなるか予測出来ない状況なので、家での過ごし方、自分に合った上手な時間の使い方、上手な息抜きのしかたなど、いろいろ考えておきましょう。

世界中の研究者の方々が、コロナについてその正体を解明すべく、有効な薬やワクチンを開発すべく一生懸命頑張ってくださってるので、いつか、こんなふうにびくびくしなくていい日がきつとくると思うけど。そんなに先じゃないといいなあ。

ところで、コロナは、ウイルスの感染も怖くて嫌だけど、かかった人を追い詰めるような報道、過剰な批判や、特に最初の頃のいじめに近い動きがとても怖かったです。

ネットもそこにのっかるようなコメントが多かった。（無記名って責任がないので、顔がでたらきつとかけないようなことも平気で書きこめちゃうんだよね）

コロナ関連情報もいろいろなものがあつたけれど、どれが真実でどれがそうじゃ

ないか、混乱もしましたね。報道に対しては、鵜呑みにしないで、自分できちんと考えて取捨選択することの重要性をあらためて感じました。

若いみなさん、おとなも間違えるし、報道だって間違ったり、意図的にねじまげられちゃうことだってあるから、注意だよ！

今はおとなも子どもも同じくたくさんの方が情報が耳に目に入ってくるので、若いみなさんも、世の中のあらゆる情報に対して、自分で考えて、また、身近なおとなに問うたりして情報を噛み砕いて、取捨選択していかなければならない時代です。大変だなあ。

大変だけど、どんなことでも、これほんとかな、って考えていくの、すごく大事。難しくても、ともすれば情報に振り回されがちになっちゃうんだけどね。

で、いろんなものごとを判断する基準は、人として生きていく、みんなとともに生きていく上で基本的でたいせつなことはなんだろうっていうと、、、、わたしは、素朴に、良心かなって思うんだけど。

まごころとか、誠意とか、おもいやりとか、書いててちょっと照れくさいけど、やっぱりそんなことをだいじにして生きていけたらいいなあ。

そして、だれかを過剰に追い詰めたりする側にまわらない人でありたいと思うんです。

ところで。

話はちょっとコロナから離れますが、いま、核兵器を違法だとして禁止する条約を国連で決議しようとしています。

日本は唯一の被爆国なのに政治的配慮で反対にまわっているんだよね。

これ、なんかおかしくない？

原爆のおそろしさや苦しさを知る人はだんだん少なくなってきているけれど語り継がれてきたその経験を活かし、もう絶対にそんな事が起きないように核兵器のない世界にするのがほんとうじゃないかなあ。

いつも思うんだけど、人を殺したら殺人で罪に問われるのに戦争なんて他の国の人をたくさん殺しちゃうんだから、罪にならないって変だよな。

【たけだみほ：1959年生まれ。東京都出身。1987年「あしたえんそく」で絵本作家としてデビュー。主な作品に「となりのせきのますだくん」（絵本にっぽん大賞、講談社出版文化賞絵本賞）「すみっこのおばけ」（日本絵本賞読者賞）など多数。NHK子ども番組のキャラクターデザインなども手掛ける。】

**★シリーズ「コロナの時代の子どもたちへ」は今回でひとまず終了します。次号には感染再拡大のイタリア（佐藤まどかさん）とフランス（たなか鮎子さん）からの現地レポートを掲載予定。ご期待ください！**



## 【実行委員のおすすめ、この一冊】

★久しぶりの実行委員のおススメ。今月は児童文学作家の加藤純子さんから、力のこもった原稿が寄せられました。

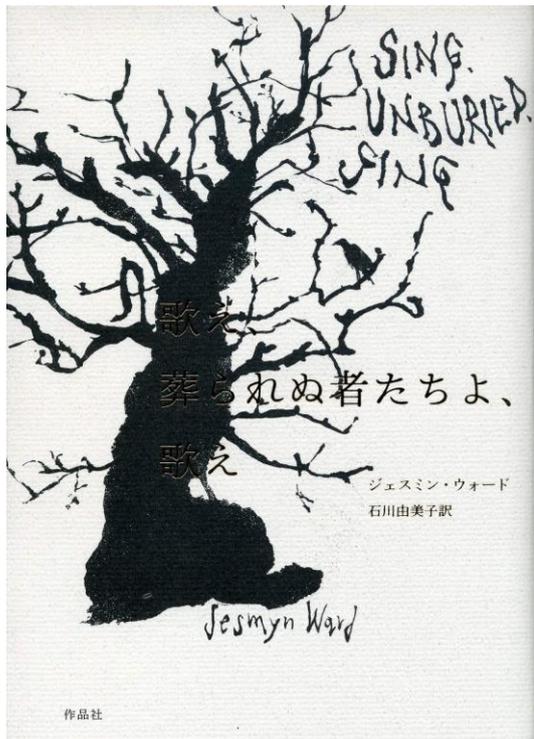
### 『歌え 葬られぬ者たちよ、歌え』

(ジェスミン・ワード作・石川由美子訳・作品社  
加藤純子

「アスリートは政治に関与してはいけないと言われることが嫌いです。これは人権の問題です」とツイートした大坂なおみは、全米オープン女子テニスで黒人たちがまるで石ころのように白人たちに殺されていったことに対し、被害者たちの名前を書いたマスクをして抗議した。彼女の母親は日本人で、父親はハイチ系アメリカ人だ。

一滴でもアフリカ系の血が入っていればアメリカでは「黒人」といわれる。これをアメリカでは「歴史的な一滴ルール」(one-drop-rule)というらしい。この言葉と真正面から向き合い、大坂なおみは自らを「黒人女性」と名乗り、胸をはった。

「バラク・オバマ」がアメリカ大統領になった時、こういう言葉が巷にあふれた。「post-Racial-America」(アメリカ人の人種問題は過去のものとなった。アメリカはチェンジしたのだ)と。ところが現実には黒人差別はその後さらに拡大している。この本は、そんな現代アメリカ状況の中から生まれた一冊である。



作者のジェスミン・ワードもまさに黒人女性の作家だ。1977年にバークレーで生まれ、3歳からミシシッピ州の黒人コミュニティの貧しいエリアで育つ。ワードは一族で初めて大学に進学する。スタンフォード大学を卒業し同じくスタンフォードの大学院の修士を終了する。卒業後、弟の不慮の交通事故死のショックが原動力となり、彼女はミシガン大学で作家としてのキャリアを磨く。けれど家はハリケーン・カトリーナに流され故郷は2度と元どおりにならなかった。そこから彼女の作家としての書くべきテーマが明確化

していく。

その後、彼女は2010年代を代表するアメリカの作家と言われるようになる。実際この本はアメリカでもっとも歴史と権威ある賞である「全米図書館賞」を黒人女性作家として初めて受賞した作品でもある。

作品はミシシッピの片田舎で暮らす黒人一家の物語だ。冒頭、ヤギを解体する生々しいシーンから始まる。主人公の「ジョジョ」が「父さん」と呼ぶのは祖父。彼は黒人であるが、どうやらネイティブアメリカンの血を引いているようだ。その描写された容姿から、そういったものが垣間見られる。

物語は13歳の「ジョジョ」と母親である「シオン」、二人の視点で交互に語られながら重層的に進んでいく。そこに幻想的な視点を入れ込み、物語は時空を超え広がっていく。

マジックリアリズムで描かれることで、この作品は黒人社会の根深い差別の歴史を深く掘り下げている。

「シオン」は高校生の時、白人である「マイケル」との間に「ジョジョ」を、その後、妹の「ミケイラ」を産んだ。二人の父親である「マイケル」が刑務所を出所するのを車で迎えに行く日、「ジョジョ」が「父さん」とハグをするシーンがある。

「ハグなんて最後にしたのがいつかも思い出せないくらいだったけれど、なんとなく大事なことのような気がして、父さんに腕をまわして胸と胸を合わせた。一回、二回、と父さんの背中を指先で軽く叩いてから離れた。（ぼくの父さんはこの人だ）。とぼくは思った。（ぼくの父さんはこの人だ）。父さんはぼくの肩に両手を置いてぎゅっと握り、それからぼくの鼻を見て、耳を見て、髪を見て、ぼくがうしろに下がると、最後に目を見た。「お前は男だ。いいな？」

その後、車のなかで繰り広げられる物語の、「ジョジョ」の心の動きに影響を与える大事な伏線だ。

黒人であること。貧しさから逃れられない現実。若くして「ジョジョ」を産んだ「シオン」は母親でありながら、母親になりきれない、その苦悩。13歳の息子「ジョジョ」との関係。そうしたものがその刑務所へ向かう車中で、単なるリアリズムではない幻想性を交えた、美しいとも思えるような緻密な描写で世界を広げ高みに上がっていく。

登場する誰もが、切なくて、悲しくて、でも生きようとする力を感じ、読みながらディテールの一つ一つに心を奪われる。目を背けたくなるほどの実感のこもった細密さ。それぞれの登場人物が、見事とも思えるほどのリアリティと説得力で、丸ごと描かれている。

また「母さん」と呼んでいる祖母はその昔、精霊と対話し薬草に凝る。その祖母が重い癌にかかり余命わずかという状況にある。寝たきりの祖母一人を描くのに、その背景まできちんと描かれているので、この貧しい片田舎での暮らしの風景が実に鮮やかに立ち上がってくる。そしてその「お母さん」は精霊に召され死んでいく。

心が不安定になると、薬物に逃げる「シオン」。その「シオン」が必死に刑務所への道を車を走らせる。

車の中で、チャイルドシートに括られた小さな妹が泣き止まない。そして何度も何度も吐く。その吐瀉物があたりを撒き散らす匂いやドロドロした感じ。そんなものさえ読みながら目の前で体験しているような気分になる。

彼女の吐き気はどうやっても止まらない。拳げ匂の果て、熱まで出てくる。「シオン」は母に教わったうろ覚えの薬草のことを思い出し、車を止めそれを探し歩き「ミケイラ」に飲ます。

うろ覚えの素人の民間療法に不安を覚えた「ジョジョ」は「シオン」の目を盗み、それを妹の口から全部吐き出させる。

母としての思いではあるのだが、あまりにもずさんなそのやり方から、「ジョジョ」は妹を守ろうとするのだ。その、かたくなとも思える「ジョジョ」の妹を守る姿。兄をどこまでも信頼しきっている小さな妹。それが繰り返し、繰り返し描写される。

「マイケル」を迎えた帰り、白人の警察官に突然車を止めさせられ、「シオン」も「ジョジョ」も手錠をかけられるシーンがある。手錠をかけられるようなことなどしていないのに。理不尽な黒人差別だ。「ジョジョ」は父さんから渡されたズボンに入れておいたお守りを触る。そのことが警察官のいかりをかい銃口を向けられる。

このあたりの描写はミネソタでの現実の事件を彷彿とさせる。あの事件の前に書かれた作品だというのに、アメリカではこうした黒人差別が日常茶飯事に行われているようだ。同じ人間なのに。人権などまったく無視した暴挙が。

いずれの描写も圧倒的な筆力とリリカルさで描かれているが、圧巻なのが、マジックリアリズムの手法で描かれている「お父さん」が15歳の時、刑務所で出会った友人のゴーストである。折々に出てくる彼はなぜ「お父さん」に逃げられたのか。それが気になって成仏できない。「ジョジョ」にだけ見えるその彼がなぜ、こうしてまわりついてくるのか。

その謎を「お父さん」が「ジョジョ」に語る。白人による生々しい黒人惨殺の一部始終。読んでいて思わず吐き気を催しそうになる。動物以下だとみなされた白人

の黒人への虐殺。そうしたアメリカの黒人差別、いや蔑視の歴史が、ここには描かれている。

この作品は、ある意味、主人公「ジョジョ」の成長物語でもある。「ジョジョ」の人としての気高さに、読みながら何度も涙を拭う。こんな蔑まされていても胸を張り生き抜こうとし、妹を守り、尊敬する「父さん」と共に、肌にとわりつくような気候と植物に囲まれた環境の中を生きる「ジョジョ」。

そして母親になりきれない、けれど確実に血がつながっているのだと確信する母である「シオン」への思い。

叙情詩のように切なく、そして美しく、黒人たちの残酷な生き様が生々しく描かれている。

この作品は、まさに現代アメリカの、黒人暴力への重い鎮魂歌としての一冊である。

(かとうじゅんこ:作家、フォーラム実行委員)

~~~~~

★読者の皆さんからの「この1冊」を募集します。心に残るこの本、子どもたちにまた、お友達にぜひ薦めたい1冊、などをお寄せください。ジャンルは児童書に限りません。書名、出版社名に簡単な紹介文(800~1000字程度)をつけて、[f.kodomo.mirai@gmail.com](mailto:f.kodomo.mirai@gmail.com) までお送りください。

フォーラムニュース19号をお届けいたします。武田さんのメッセージ、加藤さんの長文の書評と充実した内容で、いつになく長ページのニュースレターとなりました。●世界中が注目したアメリカ大統領選挙はバイデン候補の「勝利」となりましたが、これを書いている11月13日現在、まだトランプ氏は「敗北」を認めず、泥沼化も懸念されています●個人的にはバイデン氏の勝利でホッとしているところもありますが、それでもトランプ氏もまた7000万を超える票を獲得しているという事実にはきわめて重たいものを感じます●トランプという「怪物」を生み出してしまったアメリカの「矛盾」や「病理」から目をそむけてはいけないのでしょう●翻って日本では私たちも抗議声明を出した学術会議の任命拒否問題。二転三転する矛盾だらけの政府の説明にもかかわらず、一般の関心は薄く、内閣支持率にも大きな影響を与えていない様子なのが気がかりです●この任命拒否の問題は単に学者だけの、あるいは大学関係者だけの問題ではありません。この国が「法治国家」でありうるのかどうかという国の根幹に関わる問題です。どうそれを広く伝えていくか・・・これまた大きな課題を突き付けられているような気がします●新型コロナウイルスの感染拡大もとどまる気配がありません。皆様どうぞお体お大切にお過ごしください。(大竹)